

去

る一月十二日をもって松江イオン内にあったシネコン『松江東宝5』が閉館となりました。松江から映画館がなくなる？と当初は驚いたのですが、夏頃にイオンシネマとして復活すると聞いて一安心しています。

三十年前にこのシネコンがオープンするまでの松江市内の映画館を巡る状況は混沌としていました。今回は少しばかりその思い出を辿ってみたいと思います。但し、古い話なので内容に記憶違いがあるかもしれませんが何卒ご勘弁を。

以前も書いたのですが、昭和三十五年生まれの私の最初の映画館の記憶は、駅通りの現在のポトピア松江の辺りに隣同士で並んでいた『東宝劇場』と『松江大映』でした。子どもから見ればゴジラとガメラ、両雄相まみえる夢のような空間でありました。当時この一帯は映画館の激戦区で、周辺には複数の劇場が建ち並んでいました。何故かよく覚えているのが『大劇』という成人向映画の上映館で、新聞にポルノ映画の広告が載っていたという大らかな昭和の時代でした。

中学生になると興味はポルノ、じゃなくて洋画に移り寺町の『松江中央劇場』通いが始まりました。中央劇場は白潟天満宮近くの天神川沿いに

あって、サンダーバード2号のコンテナのような巨大な蒲鉾型の建物は遠くからでも良く目立ち、いかにも映画館でござい！という威容を誇っていました。

同じ頃、天神町の中村茶舗の向いのビルに『松江パレス』なる映画館があったらしいのですが、どのような映画を上映していたのかは全く記憶にありません。その後パレスは『松江東映（後に『松江国際』と名称変更）』と『松江スバル』に変わり、洋画や東宝、東映、角川系の邦画を上映していました。

あと、立地的に不思議だったのが松江随一の飲み屋街である伊勢宮の横丁にあった『松江スワン座』、後の『松江第二中央』でしょう。永らく松江に住んでいながらその存在を知らなくて、初めて行ったときは「こんな所に映画館があったんだ!」と狐につままれたような気分になったものです。

そう言えばいつぞや宮森氏が想い出を書かれていた殿町の松江一畑百貨店内にあったという『一畑劇場』ですが、NHK松江放送局のHPで映画館内の写真を見ることが出来ます。「NHK一畑劇場」でググると出てきます。他にも懐かしい写真がてんこ盛り、まさに昭和の秘蔵写真ですね。

2025.1.27

1477号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)

〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

木幡智恵美

20

老い老いに

重油流出事故で、隠岐では柄杓が品切れだそうです。ああ。「夕焼け通信二七四号、一九九七年一月二十日発行の編集後記にある。この年一月二日未明、島根県隠岐島沖で、ロシアのタンカー「ナホトカ号」の船体が分断、重油が流出したのだ。船首が漂着したのは福井県三国町、流出した重油六千二百四十キロリットルが島根県から石川県にかけての沿岸に寄せた。この重油の処理には延べ三十万人のボランティアによる人海戦術が功を奏したとのことだ。

昨年末にも、ロシアのタンカーが座礁し黒海に重油が流出している。絶滅危惧種のイルカ五十八頭の死体が見つかったとのことだ。深刻な環境被害が生じているという。

そうした環境問題について、カナダ政府発行の環境パンフ「ある魚の物語」の翻訳が五回にわたって夕焼け通信に掲載された。カナダ在住のEさんからである。カナダにはDFOという湖や川、海岸の辺りにいる魚を保護したり世話をしたりする政府の機関があり、国が積極的に環境政策を実施しているということだ。

正月に子や孫たちと一緒にご飯を食べながら、野菜や米、魚など食料品の高騰の話題が出た。「米の値段が倍になったよ」「キャベツなんか三倍だよ」などなど。猛暑、地球温暖化の影響は否めない。快適な暮らしを求め続けてきた我々が招いたことだから、今更どうにもできないことではあるが。先日何気なくテレビを流していると、二十五年後にはもう魚が食べられなくなるかもしれないと聞こえてきた。自分はもう生きていないだろうけど、子や孫たちのことを考えると、少しでも希望を持てる未来であってほしい。

阪神淡路大震災から三十年、東日本大震災からもうすぐ十四年。福島原発の事故後の処理がまだまだだというのに、島根原発は再稼働した。八十億にも膨れ上がった人類、そしてそれを養うためにだけ飼育される動物たち、植物たち。人類の存在を維持するためにはどうしてもエネルギーは必要で、その分環境は破壊される。致し方ないとはいえ、今、目先ではなく、子や孫たちが安全で安心して過ごせるような地球環境を一人一人が考えないといけないのではないかと思う。私にできるのは、せいぜい電気や水を無駄に使わず、食べ物は捨てることなく使い、といった細々としたことだけだ。

30代フリーター 「米国第一」を掲げ、関税の引き上げや不法移民の追放、領土の拡張など「帝国主義的」なファイティングポーズを取るトランプが大統領に返り咲いた。

年金生活者 帝国主義戦争の引き金を引きかねないように見えるトランプが実際に引くのは無血の戦争の引き金であり、その最大の武器が関税の引き上げにほかならない。それを主要な敵である中国に対して大量投入しようとしている。

「米国第一」は他国の面倒はもう見ないということだ。覇権国家の座からずり落ちたのだから、その余裕はない。ウクライナに武器援助するのも減らしていく。紆余曲折はあっても、戦争は終わりに向かうほかない。イスラエルとハマスに対しては、このまま戦闘を続け「地獄が訪れる」と脅して停戦に持ち込んだ。

トランプは1期目の退任演説で、「私は新たな戦争を始めなかった、ここ数年で初の大統領となったことを特別

るかわからないリスクをはらむ。無血の代償として新たな緊張とダメージをとまなうのがパクス・トランプピアーナだ。

30代 韓国では、大統領による非常戒厳の宣布後、かつてないほど左右の分断が深まっている。トランプはそれによって臨むだろう。

年金 韓国の分断は南北の分断の反映であり、欧州で35年前に終わった東西冷戦が朝鮮半島では今なお続いていることを今回の事態はあらためて示した。

この左右の分断は、民主化して自由にもが言えるようになって公然化し、深まった。独裁政権の時代には今ほどあらわにならず、政権の第一の敵は北朝鮮だった。それが今は北に対して融和的な左派と警戒的な保守派が互いを最大の対立相手とするようになった。

この左右の対立は、親米的な自民党と親ソ的な社会党が対立した日本の55年体制と相似形をなす。韓国が日本と違うのは左右が拮抗し、政権交代が繰り返されてきたことだ。日本の民主主義がアメリカから与えられたのに対

に誇らしく思う」と述べている。パクス・トランプピアーナ、トランプによる平和が到来するかもしれない。

30代 それにしては世界は彼の再登板に身構えている。

年金 パクス・トランプピアーナが訪れたとしても、それで世界の緊張がなくなるわけではない。流血の戦争が縮小する代わりに無血の戦争が拡大する。経済が武器化されて企業や家計の緊張が高まり、武器が経済化されて新たな軍事上の緊張が生まれる。

世界の戦争の本流は第2次世界大戦を最後に、破壊力を競う流血の戦争から、抑止力を競う無血の戦争に移った。その最初の世界戦争が東西冷戦だった。核の圧倒的な破壊力が流血の戦争を限られた地域に押し込め、米ソはそれぞれの軍備の体系の性能を、実際に使用することなく競い合った。

現在の無血の戦争は、そうした軍事的な力だけでなく、経済的な力があるを言うようになった。トランプはそれを背景に関税を最大の武器として駆使

し、韓国は自らの手で民主制を打ち立てたことによる違いだろう。

日本の55年体制、すなわち東西冷戦の日本版は、ソ連の崩壊とともに社会党が崩壊して終わった。これに対し、北朝鮮は崩壊しないまま核を持つまで

しようとしている。実施されればアメリカを含む各国は関税のかけ合いでそれぞれが打撃を免れないだろう。

それに加えて彼は武器の経済化も進めている。大前研一によれば、トランプは戦争をせずに軍需産業を潤わす新しい方法を編み出した。

《米国の軍事力に頼ってきたNATOにケチをつけ、「NATO離脱」をちらつかせて軍事負担の均衡を求めた結果、加盟国の防衛費支出拡大という「果実」を得た。当然、兵器は世界一の武器輸出国である米国からも大量に買い込むことになるわけである。

一方で、北朝鮮を挑発して緊張感を高めれば、日本はイージス・アシオアとF35戦闘機100機、韓国なら高高度防衛ミサイル「THAAD」などの高価兵器を購入してくれるし、中東を引っかき回せば、お得意様であるサウジアラビアやエジプト、UAEなどが大量に武器を買ってくれる。》（「大前研一メソッド」、2019年8月19日）

売りつけた大量の武器はいつ発火す

になり、朝鮮半島および韓国内の冷戦は終わらないままだ。

その韓国に対し、トランプは1期目のときと同様に親北朝鮮的な姿勢で臨もうとしている。実利を優先する彼は理念を嫌う。東西冷戦は理念の戦いだった。1期目のトランプは朝鮮半島に残るその戦争を早く終わらせ、理念抜きのデイルのできる東アジアにしたい。金正恩と3回も首脳会談をした。

30代 米中対立は新しい冷戦と呼ばれることがある。

年金 トランプはそれを東西冷戦の延長とは思っていないはずだ。中国は冷戦のさなかにソ連と戦火を交え、東側陣営から離脱した。そればかりか「改革開放」の名のもとに資本主義化の道を歩んだ。それはマルクス主義に逆らうことであり、言い換えれば理念を放棄することを意味する。したがって、トランプにとって、中国は理念上の対立相手ではない。けれど、実利では決定的に対立する。彼は中国との無血の戦争をクールに推し進めるだろう。

ニュース日記 954
中村 礼治

パクス・トランプピアーナ